

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Research on the Ethnogenesis of the Japanese People : Review and Outlook

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 高明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003911

戦後の日本民族文化起源論

—その回顧と展望—

佐々木 高明*

Research on the Ethnogenesis of the Japanese People: Review and Outlook

Komei Sasaki

本稿は岡正雄・柳田国男の所説に始まり、民博の「日本民族文化の源流の比較研究」をへて、日文研を中心とした「日本人及び日本文化の起源の研究」に至る、戦後の日本民族文化起源論の展開の概要とその間にみられた諸学説の変遷を大観し、あわせてこの種の起源論の直面するいくつかの問題点を指摘したものである。結論として次の4点を摘記することができる。

1. 日本文化を単一・同質の稲作文化だとするのではなく、それは起源を異にするいくつかの文化化が複合した多元的で多重的な構造をもつものだという認識が一連の研究を通じて共有されるようになった。

2. 考古学・人類学・遺伝学その他の隣諸科学の発達とそれらとの協業の成果が起源論の研究に格段の発展をもたらした。その傾向は今後も一層顕著になると思われるが、この種の学際的総合的研究を推進するには、すぐれた研究プロデューサーとそれを支える大型の研究組織が必要である。

3. 日本民族文化起源論の展開は、わが国では日本人のアイデンティティを問うという問題意識に支えられて展開してきたが、最近の国際化の進展などの状況のもとで、この種の問題意識とその理解を求める社会的要請は一層拡大してきている。それに応じることが学界としても必要である。

4. だが、現下の最大の問題は、組織の問題ではなく人の問題である。大林太良が指摘した如く「最近の若い世代の民族学者に日本民族文化形成論の研究が低調なこと」が今日の難問である。日本民族文化起源論を含め、歴史民族学的課題の克服に、日本の民族学界は、今後どのように対応するのだろうか。

This paper outlines the development of post-war era research concerning the ethnogenesis of the Japanese people, beginning with theories advocated

* 国立民族学博物館元館長

Key Words : Ethnogenesis, Historical ethnology, Identity of Japanese, Multi-disciplinary research

キーワード : 日本文化起源論, 歴史民族学, 日本人のアイデンティティ, 学際的研究

by Masao Oka and Kunio Yanagita, the “Comparative Analyses of Japanese Ethnogenesis,” undertaken by the National Museum of Ethnology, up to the “Interdisciplinary Study on the Origins of Japanese Peoples and Cultures,” led by the International Research Center for Japanese Studies. This paper also summarizes how theories concerning ethnogenesis have changed over the years and points to some problems pertaining to research on this theme. In conclusion, this paper presents the following four observations:

1. Through continued research on this topic, we have come to share the recognition that Japanese culture cannot simply be defined as a single, homogeneous, rice-growing one. Instead, it is a combination of several cultures with different origins and is multi-dimensional and multi-layered in nature.

2. The evolution of archaeology, anthropology, genetics, and other relevant sciences, as well as cooperation with researchers specializing in these fields, has contributed to remarkable progress in ethnogenetic research. While such a cooperative approach will take on greater importance in the future, successful implementation of comprehensive multi-disciplinary research of this kind requires high-caliber personnel capable of coordinating research efforts, as well as large-scale research organizations that can support such activities.

3. In Japan, the efforts of researchers committed to exploring the identity of the Japanese people have been the driving force behind the development of research on the ethnogenesis of this group. Against the backdrop of recent globalization, there has been growing demand for this type of ethnogenetic research within society, and it is the responsibility of the academic community to address this demand.

4. However, what makes us most anxious at the moment is not the problem of organization, but the problem of personnel. As Taryo Obayashi has already remarked, the decreasing interest among younger ethnologists in the formation of Japanese culture is a serious problem. In what manner will Japanese ethnologists address the subject of ethnogenesis and other historical, anthropological issues in the future?

はじめに

1 岡正雄と柳田国男の日本文化起源論

2 日本文化形成論へのいくつかのアプローチ

3 日本民族文化の源流の比較研究
—民博を中心とした学際研究

4 日本人及び日本文化の起源の研究

—人類学を中心としたプロジェクト

5 日本民族文化起源論の課題と展望

本稿は、ヨーゼフ・クライナー教授の退官記念論文集 H. D. Ölschleger (ed.) *Theories and Methods in Japanese Studies: Current State and Future Developments, Papers in Honor of Josef Kreiner*, 2008. に収録された論文 *The Origins of Japanese Ethnic Culture—Looking Back and Forward—* の和文原稿（2006 年 3 月脱稿）に、その後（2008 年 11 月）に、いくつかの修訂を加え、補筆したものである。

はじめに

日本の民族学の特色とその動向をとりまとめた『日本民族学の現在—1980 年代から 90 年代へ』（1996）の巻頭論文「日本民族学・文化人類学の歴史」のなかで、ヨーゼフ・クライナーは、次のような指摘を行っている。

「日本における民族学ないし文化人類学的関心の方向が、明治期以来の趨勢として、日本民族の起源の問題に絶えず収斂する傾向が強くみられること」、また「日本人ないし日本民族のアイデンティティを問うという問題意識が（日本の民族学的研究の中に）通奏低音のように存在すること」などが、日本の民族学ないし文化人類学研究に顕著にみられる動向だということである。さらに「欧米の民族学が民族の起源問題について、自国よりも他国のそれに大きな関心を示す傾向がみられるのに対して、自国の民族起源の問題に強い関心を有するのは、ひとり日本の民族学にみられる特徴であるといえるのではなかろうか」とも述べている（J. クライナー 1996: 3）。日本の民族学界の実情を熟知するこのクライナーの発言は、日本民族学の有してきた研究傾向の大きな特色の一つをみごとに指摘したものであるといえることができる。

確かに 1945 年、第二次大戦の敗北により、戦前の天皇を中心とした国家観が崩壊し、目標を見失った日本の民族学界や歴史学界などに強烈な刺激を与え、その蘇生に大きな役割を果たしたのも、やはり新しい日本民族文化起源論の提唱であった。それは従来のものとは異なる新たな起源論として、戦後の日本民族学の再出発を象徴するものでもあった。

1 岡正雄と柳田国男の日本文化起源論

その新しい日本民族文化起源論の提唱者は、ウィーンで学び、すでに「古日本の文化層」¹⁾ という大論文を書いていた岡正雄教授であった。その内容が具体的に示されたのは、1948 年 5 月に、岡を中心に石田英一郎が司会し、江上波夫・八幡一郎らが

参加した「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」という画期的な座談会であった。その記録が翌1949年9月に日本民族学会の機関誌『民族学研究』第13巻3号に掲載された（石田・岡・江上・八幡1949）。この座談会は大きく2部で構成されている。第1部は「日本国家の形成と皇室の種族的＝文化的系統」、第2部は「日本民族の源流とその基盤」が、それぞれテーマとされ、民族学者の岡正雄の学説を中心に、歴史学・考古学に詳しい江上・八幡の2人の意見がそれを補い、活発な議論が展開された²⁾。

天皇制を中心とするいわゆる「皇国史観」から解放されたばかりで、研究の方向性がまだよく定まっていなかった戦後の日本の学界——民族学ばかりでなく、民俗学・歴史学・考古学その他を含む——に与えた、この座談会の影響は計り知れないほど大きなものであった。そこでこの討論、とくに第1部のそれを基礎にして江上波夫のいわゆる《騎馬民族による征服王朝論》が生み出され（江上1967）、日本古代の国家形成論に大きな影響を与えたことはよく知られている。

岡自身は、この座談会のあと、その構想を整理して1956年には「日本民族文化の形成」をまとめ（岡1956）、さらにそれを修正して1958年には「日本文化の基礎構造」（岡1958b）を発表し、これが岡学説の最終の決定版という形になっている。そこでは民俗学＝民族学的方法と先史学的方法によって検証が行われた結果、日本の民族文化は、下記の五つの《種族文化複合》によって構成されていることが明らかになったという。

- (1) 母系的・秘密結社の・芋栽培—狩猟民文化
- (2) 母系的・陸稲栽培—狩猟民文化
- (3) 父系的・「ハラ」氏族的・畑作—狩猟・飼畜民文化
- (3) 男性的・年齢階梯制的・水稲栽培—漁撈民文化
- (4) 父権的・「ウジ」氏族的・支配者文化

この岡学説についての解説や批判については、大林太良やその他の人たちによるいくつかの論考があり（大林1979: 415–431; 大林1994: 267–277; 蒲生ほか1970: 375–434）、詳しくはそれらに譲るが、岡自身が1930年代にウィーンで学んだこともあって、この学説にはウィーン学派的なやや図式的なとらえ方といえるような点が少なくない。また、その仮説の立証に用いられた資料などが、今日の視点からみて問題になる個所も少なくない。こうした点からみて、現在の時点で、この岡学説をそのまま認めることは、いう迄もなく不可能である。しかし、相互に関係するいくつかの社会的・文化的特色を「種族文化」という文化の担い手を明確にした一種の文化クラスターとしてとりまとめ、その存在を立証するため、民族学をはじめ民俗学・考古学・

言語学などの諸成果を総合的に用いたことなど、その後の日本民族文化起源論の展開に与えた影響は少なくない。そういう点で、岡学説の登場は、戦後の日本民族学の出発点を形づくったものと言っても過言ではない。

このほか戦前から戦後の時期に民族学の分野において、日本民族文化起源論に大きく寄与した研究者としては、朝鮮半島を主な研究領域として神話や文化史の研究を行った三品彰英（三品 1970～1974）や東南アジア民族誌や神話研究に業績のあった松本信広（松本 1971; 1978～1979）などをあげることができる。だが、日本民族文化起源論の大きな流れを追う本稿では、それぞれの詳しい紹介は割愛する。

他方、「日本民俗学の父」といわれた柳田国男は、1961年にその最後の著作となった『海上の道』（柳田 1961）を著わし、日本文化の基礎となる稲作が南島（南西諸島）を経由して伝来したとするユニークな仮説を発表した。この海上の道についての紹介と批判は、私の近著（佐々木 2003（上）：10-18）で述べているので詳細はそれに譲るが、柳田が、この時期（そこに掲載された論文の初出の多くは 1950～1953 年頃で、柳田の「海上の道」の構想は、この時期にまとめられた）に日本文化＝稲作文化の起源論の発表を急いだのには、大きく二つの理由があったと思われる。

その一つは、1951年に文化勲章を受章し、学界の最高の指導者となった柳田は、戦後の国民の心のあり方、換言すればナショナル・アイデンティティの回復に強い関心を示すようになった。そのアイデンティティの回復のためには「日本民族の起源の解明」が緊急の課題であり、それと関連して日本民族と不可分な関係にある（と柳田が信じていた）「稲作の伝来」の問題が解決されねばならないと柳田は考えたのである。しかも、先述の「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」の座談会で示された学説、なかでも江上波夫のいわゆる騎馬民族征服王朝説に対し、柳田は強い反発を感じたようである。北からではなく、南からの路をへて、遠い先祖が稲をたずさえてこの国にやってきたことを、柳田はその詩人的な直感と信仰に近い強い信念をもって主張したのである。

だが、この「海上の道」の学説に対しては、考古学・言語学・歴史学その他の諸分野から、その仮説を実証するに足る事実は認め難いという厳しい批判が続出し、この碩学が提唱された学説は、残念ながら学界から十分な支持をうることはできなかった。しかし、柳田が示した日本文化をイコールで稲作文化とみる考え方は、柳田のもつ学界の権威としての位置づけとも結びつき、その後も日本の学界や言論界に広く根を下ろし、支配的な思潮となったことは確かである。

この岡・柳田 2 人の学説を批判的に継承しつつ、日本文化起源論をさらに展開させ

ようと試みたのが、この2人とも関係の深かった石田英一郎であった。石田は、民族学・考古学・歴史学などの研究者による共同研究を組織し、『シンポジウム 日本国家の起源』(1966),『シンポジウム 日本農耕文化の起源』(1968)を手固くまとめたほか、自らも『日本文化論』(1969)を世に問い、そこでは日本語と稲作文化の成立が確実な弥生時代を日本文化の起源の時期として確認できることを強調している。

このような動きを背景に、日本民族学会でも機関誌『民族学研究』第30巻4号(1966年)を「日本民族文化の起源」の特集にあて、民族学(大林太良・竹村卓二)、人類学(金関丈夫)、考古学(国分直一)、言語学(村山七郎)からの論考を掲載したのち、それを総括して大林は、いくつかの新しい視点の導入を指摘した上で、日本民族=文化起源論は一つの専門分野からではなく、学際的な広い視野から研究をすすめる必要性を強調している。この大林の指摘は、1970年代末以降の国立民族学博物館や国際日本文化研究センターを中心とする共同研究の中で実現されていくことになる。

2 日本文化形成論へのいくつかのアプローチ

岡・柳田2人の碩学の問題提起によってはじまった戦後の日本民族文化起源論に大きな前進がみられたのは、1950年代末から1970年代にかけての時期である。それは東南アジアやインド・ヒマラヤ地域へのフィールド・ワークの開始と軌を一にしている。なかでも、日本民族学協会が主催し、1957年から1963年にかけて3次にわたって東南アジアおよびインド・ネパールへ若手の研究者を派遣した「東南アジア稲作民族文化総合調査団」は、ほぼ同時期に活動した「大阪市立大学東南アジア学術調査隊」などとともに、この種の海外学術調査の嚆矢をなすものであった³⁾。

第1次稲作民族文化調査団(団長 松本信広)のメンバーであった岩田慶治は、タイ・ラオス・カンボジアなどでの調査資料をもとにして『日本文化のふるさと』(1966)を著わした。そこでは、東南アジアの諸民族の衣・食・住を中心とする物質文化や稲作農耕の技術や儀礼、あるいは年中行事やカミ信仰などの諸特色に日本文化と類似する多くの特徴のみられることを指摘し、「日本文化の基礎的部分は、いちじるしく南方的なものである」と結論づけている。

岩田が主としてフィールド・ワークの成果にもとづいて日本民族文化の起源を論じたのに対し、主として浩瀚な文献研究によって、日本民族文化起源論を終始リードしてきたのが大林太良であった。その業績は膨大なもので、『日本神話の起源』(1961)にはじまり『稲作の神話』(1973),『東アジアの王権神話』(1984),『日本神話の系譜』

(1986a) などとつづく日本神話の起源や系譜をめぐる比較民族学的研究をはじめ、儀礼や習俗、さらには物質文化などの比較研究も行い、『邪馬台国』(1977)や『東と西、山と海』(1990)、『北方の民族と文化』(1991)、『正月の来た道』(1992)のほか、数多くの著作を刊行し、東北アジアや東南アジアを含めた東アジアの文化史を緻密に再構築し、その中に日本民族文化起源論を位置づけようと試みた。

その学説の大意は、中国南部の照葉樹林帯から縄文時代の後期頃に「焼畑耕作民文化」が伝来し、その基礎の上に弥生時代の初期頃に「水稻耕作民文化」が渡来して、いわゆる倭人の文化が形成された。その後、主として朝鮮半島から「支配者文化」が渡来して古代国家が成立した。その頃が日本民族の形成に決定的な時期だったというものである。その考えは、比較的初期の論考である「民族学より見た日本人」(『稲作の神話』の第1章)の中にすでに示されているが、その後の多彩な研究の成果をとりまとめ、彼自身の日本民族文化起源論が体系的に示されることはついになかった。J・クライナー編『日本民族学の現在』(1996)の中に収められた「日本民族の起源」は、きわめて短い論説だが、岡学説と対比しつつ、その後の日本民族文化起源論の展開のあとを、大林自身の学説の変更も含めて述べたものであるが、むしろ同一の主題を、より詳細に東方学会の機関誌上で論じた *The Ethnological Study of Japan's Ethnic Cultures: A Historical Survey* (1991 *Acta Asiatica* 61) が、もっともまとまった形で示された大林の日本民族文化起源論となっている。

また、先述の岡正雄の学説を基礎にして、日本の婚姻や社会組織について比較民族学的研究を展開してきたのが江守五夫である。彼は年令階梯制や寝宿、「よばい」や歌垣を伴う《一時的妻訪婚》あるいは双系的社会の特色などは、江南や華南の民族文化に連る南方系の文化的要素だと指摘する。それに対し、《嫁入婚》に伴う多くの婚姻習俗や各種の呪術的婚姻儀礼、さらには「カマド分け」を伴う分家習俗や各種の家族慣行などが、中国東北部の諸民族のそれとよく類似する点などをあげ、北方系の文化要素として父系の親族組織が、日本の基層文化の中に存在したことを主張している(江守 1986; 1990 など)。

さらに民俗学の分野では、坪井洋文が『イモと日本人』(1979)を著わし、日本全土に分布する正月に餅を食べない「餅なし正月」(「イモ正月」)の習俗やその背景、あるいは各地の畑作儀礼などの詳細な分析を行った。その結果、日本文化には「稲作を基軸とする文化類型」のほかに、稲と等価値のイモで象徴される「畑作を基軸とする文化類型」の存在することを見出し、そのことを強く主張した。これは日本文化を単一・同質の稲作文化と規定した柳田国男の考えを否定するものであり、日本の民族

文化の特質を、どう捉えるかという点をめぐり、この坪井の主張は学界に大きな影響を与えた。

また、考古学者の国分直一は民族学・民俗学的研究にも高い関心を示し、『日本民族文化の研究』（1970）や『環シナ海民族文化考』（1976）、『日本文化の古層』（1992）はじめ多くの著書を世に送り、日本の基層文化の形成を環シナ海文化の動態の中で把握しようと試みた。

以上述べたいくつかのアプローチのほかに、大林太良によると日本文化形成論に「大きな刺激を与え、新しい展開を促進させたのが農学者の中尾佐助が提唱した、照葉樹林文化論であった」という（大林 1986b: 2）。それは「学界ばかりでなく、一般読者の関心も惹いた」といわれている。この照葉樹林文化論というのは⁴⁾、ヒマラヤの中腹から雲南高地・江南の山地をへて西南日本に連る照葉樹林帯には、さまざまな共通の文化要素が存在する。それによって特徴づけられる「照葉樹林文化」とよぶ特有の文化クラスターの存在に注目し、それを手掛りにして東アジアの文化史を分析しようとする学説で、日本の基層文化の形成にも江南や華南の照葉樹林文化の影響が少なくないと考ええるものである。

1966年に中尾により提唱されて以後（中尾 1966）、佐々木もその共同研究に加わり、『続・照葉樹林文化』（上山・佐々木・中尾 1976）、さらにそれを受けた『照葉樹林文化の道』（佐々木 1982）などの著作で、照葉樹林文化論の大綱を示している。また佐々木は『稲作以前』（1971）を著わし、自らの東南アジア・インドでのフィールド・ワークの成果と照葉樹林文化論の枠組などを用いて、水田稲作の伝来以前に日本列島に焼畑を基軸とする農耕とその文化が存在したことを推論した。この照葉樹林文化を基調とする日本文化形成論の論点は、先述の大林や江守、あるいは坪井らの日本文化起源論と照応するところが少なくない。1970年代後半になって日本民族文化起源論に一つの方向が見られるようになってきたといえる。

3 日本文化の源流の比較研究—民博を中心とした学際的研究

1950年代から開始された九学会連合による国内各地の総合調査や前述の民族学協会による東南アジアの稲作民族文化の総合調査など、1960年代から1970年代にかけて国内外における調査研究が次第に盛んになった。それに伴い、民族学や人類学・考古学を中心に、関係諸科学の分野における資料の蓄積と学説の整備がすすめられた。これらの資料の蓄積と学説のとりまとめに、一定の役割を演じたのが国立民族学博物

館（民博）における日本文化源流の研究プロジェクトであったといえることができる。

民博は、1974年に日本万国博覧会の跡地に創設された国立大学共同利用機関で、わが国における唯一の大規模な民族学の研究・情報センターである。創設後、建築を行い、展示の準備をすすめ、1977年11月に開館することができた。その翌1978年から、民博では学界における重要な研究テーマを選び、長期にわたり総合的計画的に研究を行う「特別研究」のプロジェクトを発足させたが、その一つが10年計画の「日本民族文化の源流の比較研究」のプロジェクト（代表 佐々木高明）であった。

まさに日本民族文化の起源の研究を指向するプロジェクトで、まず初年目に全体の構想と計画が検討された。それは第2年度（1979年）から毎年、研究のテーマとその責任者を決め、国内外の専門家によるタイトな共同研究を組織し、年度末に4日間にわたるシンポジウムを開催して、その成果を各責任者が編集して単行本として出版するというものであった。各年度の研究テーマと研究責任者・研究成果の刊行物は表1に示した通りである。

いま、その報告の一つひとつについて詳論することはできないが、例えば初年度（1979年度）の「農耕文化」の研究では、イモ類、雑穀類、北方系作物、稲作、家畜などにつき作物学や遺伝学の立場からの詳しい報告があり、ついで稲作文化、人口、食事文化、神話などについての民族学からの報告があつて、それらを受けて、考古学者や民俗学者なども加わり、日本農耕文化の源流をめぐって総合的な討論が行われている³⁾。このような自然科学の諸分野も含めた学際的な研究の展開が、このプロジェ

表1 国立民族学博物館における日本民族文化の源流の比較研究プロジェクト

年度	研究テーマ	責任者と刊行物*
1978	研究の方法と計画	館内の覚書き
79	農耕文化	佐々木高明（編）、1983
80	シャマニズム	加藤九祚（編）、1984
81	音楽と芸能	藤井知昭（編）、1985
82	すまい	杉本尚次（編）、1984
83	社会組織—イエ・ムラ・ウジ	竹村卓二（編）、1986
84	民間伝承	君島久子（編）、1989
85	狩りと漁労	小山修三（編）、1992
86	日本語の形成	崎山 理（編）、1990
87	まとめ（補遺）	佐々木高明・大林太良（共編）、1991

*具体的な書名、出版社などは引用文献の項に詳細を示した。

クトの全体を通ずる大きな特色となったといえることができる。

「シャマニズム」の研究では北と南の文化的系統が問題になり、「音楽と芸能」では律音階や民族音階、多声性など音楽文化の基層にみられる特色と民族学が復元する文化クラスター（例えば照葉樹林文化）との関係が問題になった。「すまい」の研究では、民家研究にはすでに大きなデータの集積があったので、それをもとに地理学や考古学、とくに建築学との共同研究の成果が注目された。また「社会組織」の研究では、日本民俗社会の特色を東アジア社会との社会人類学的な比較研究から明らかにする第1部と日本史学の立場から「ウジからイエへ」を論ずる第2部および考古学を中心に先史社会の復元を行う第3部から成り、イエを基調とする日本民俗社会の特質が終始問題とされた。

さらに「民間伝承」では神話・昔話・伝説等を対象に、北アジアから東南アジアに至る広い地域の比較研究とその系譜の追求が試みられた。また「狩りと漁撈」では生態学のほか民族学や民俗学、さらには考古学からの情報提供も生かして、縄文社会の復元とその源流を見定めようとし、「日本語の形成」では民族学者のほか、日本列島周辺の諸言語の専門家に国語学者も混じえての討論が展開された。その結果「日本列島においては縄文時代を通じ、長期間にわたる複数の言語の併存と言語接触の結果、遅くとも弥生時代に日本語は混合語として成立した」という点が、全体として了解されたようである。この点は、この民博プロジェクトにおける貴重な結論の一つといえることができる。

1988年1月に実施された最終のシンポジウムでは「まとめ」のほか、補遺として「日本人の成立」や「日本の中の異族」の問題などがとりあげられ、総括討論では日本民族文化の形成過程において、三つの大きな画期—①縄文時代前～中期、②弥生時代初期、③古墳時代（支配者文化形成期）—のあることが指摘され、その意義が論ぜられた。

全体として、この民博を中心とした日本民族文化の源流を追求する研究プロジェクトにおいては、民族学を中心に民俗学・考古学・歴史学・言語学・音楽学などをはじめ、生態学・人類学・作物学・遺伝学など自然科学の分野まで広くカバーする学際的な研究の展開が、その研究上の大きな特色となった。また、時間軸としては縄文時代が源流論の一つの原点として捉えられるとともに、先述の三つの画期とともに、テーマによっては中世・近世にまで、その視野が拡大された。また空間的には北東アジアから東南アジアに至る東アジアの地域が主な比較研究の対象地域となり、「北からの道・南からの道」をへて、日本列島に到達したいくつもの文化の流れが重層して日本

民族文化が形成されたとみる見方が、全体として定着したとみて差し支えない。

このプロジェクトは1980年代から1990年代にかけて日本民族文化の起源論の形成に大きな影響を与えた。プロジェクトを主宰した佐々木は『日本史誕生』（1991）で旧石器時代から稲作の伝来までの日本の基層文化の形成過程を大観し、さらに『日本文化の多重構造』（1997）では《照葉樹林文化》《ナラ林文化》《稲作文化》という文化の大類型の概念を駆使して、主として民族学の立場から、日本文化が多学的で多重な構造をもつことを強く主張した。

4 日本人及び日本文化の起源の研究—人類学を中心としたプロジェクト

1987年、国立民族学博物館と同じ大学共同利用機関の一つとして、京都に国際日本文化研究センター（日文研）が創設された。同センターは「日本文化の学際的・総合的な研究と世界の日本研究者への研究協力」を目的として設置されたもので、発足の時から人文・社会科学系の研究者のみではなく自然科学系の研究者もメンバーに加え、文字通り学際的・総合的な日本文化研究をめざしていた。

その中心の1人が人類学者の埴原和郎で、日文研創設の直後から「日本文化の基本構造とその自然的背景」という共同研究を立ち上げ、その成果は『日本人と日本文化の形成』（1993）という報告書にまとめられた。自然人類学を中心に歴史学・日本文学・言語学・考古学・民族学・民俗学・遺伝学・生態学など、学際的できわめて多彩な研究の成果がまとめられた。こうした研究動向を背景に、1997年度から当時、日文研の教授であった人類学者の尾本恵市を代表者とする文部省科学研究費重点領域研究「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」のプロジェクトが発足し、2000年度まで4年にわたって研究がつづけられた。その研究の概要を、このプロジェクトの総括班の1人であった私は、成果報告書の中で、ほぼ次のように述べている（佐々木2002: 55-56）。

この研究では、当初から「自然環境」「人類学」「考古学」「日本文化」の四つの研究班が編成され（表2参照）、各班単位で研究活動をすすめるとともに、随時、横断的な研究集会やシンポジウムが実施され、学際的な研究交流を行う形で進められた。自然環境班では日本海のお底堆積物や有孔虫殻の酸素同位体分析、その他などにより古環境の復元を行うとともに、古人骨の炭素・窒素同位体分析や栽培植物のDNA分析などを通じて、古代人の食性、あるいは栽培化や家畜化の時期およびそのプロセス

表2 日本人および日本文化の起源に関する学際的研究の組織

研究班の名称（代表者）	研究テーマ
自然環境（小泉格）	日本先史時代の自然と文化的環境の研究
人類学（馬場悠男）	形態と分子からみる日本人の起源と形成に関する研究
考古学（春成秀爾）	先史時代の生活と文化
日本文化（千田稔）	日本文化の源流と形成に関するアジア諸地域との比較研究
総括（尾本恵市）	研究の計画・活動の企画調整、成果の評価

や渡来のルートなどについて、各種の新しい資料を提供した。人類学班では、埴原和郎の提唱した「二重構造モデル」の検証を中心に、形態研究と分子レベルの研究の双方から縄文人と渡来弥生人の分析を行い、日本列島における基層集団と渡来集団の二重構造は認められるが、基層集団の起源については、なお不明な点が少なくないという結論に達している。

考古学班では、旧石器～縄文時代、縄文～弥生時代、弥生～古墳時代の各変革期の生活と文化を明らかにするため、全国から代表的な遺跡13箇所を選び、その発掘調査を行うとともに、資料集29冊、論文集（「先史時代の生活と文化」）1冊を刊行した。組織的な調査にもとづく実証的資料の蓄積がすすむとともに、日本文化の形成をめぐるいくつかの新しい視点も見出された。日本文化班では、表2に示した共通テーマのもとに中国西南部地域や長江流域の民俗文化、あるいは東北アジアやアイヌの文化、さらには南西諸島の伝統文化などとの比較研究を行うとともに、渡来文化や日本文化の自律性についての分析を行い、きわめて多様な視点から日本文化の多重性に迫ったことができる。

全体として、自然科学系の研究では、例えばDNA分析など、最新の研究方法による新しい研究の成果の多くが、人文科学系の研究者にも利用できる形で提供された。この点が、さきの民博の源流プロジェクトと比べ大きく進歩した点のひとつである。他方、考古学の分野では最近の発掘調査の諸成果の報告と検証が丹念に行われ、日本文化の研究では中国や韓国など東アジア地域との比較民俗学的研究の報告が目をひいた。アジア的視野に立つ、日本人及び日本文化の研究が、ようやく本格的に展開しはじめたという感が深い。

だが、この研究プロジェクトの成果に問題がないわけではない。学際的・国際的な総合研究をめざしながら、当初から四つの研究班構成で始めたこの研究は、さまざまな配慮にもかかわらず、日本人・日本文化の起源について、必ずしも学際的・総合的

な視点からまとめた結論を出すことはできなかった。さらに残念なことは、総合的な研究をまとめた書冊の出版も実現せず、今日に至っていることである。

だが、そこには特殊な事情も存在する。この「日本人・日本文化の起源」の研究プロジェクトが終了した直後から、NHK スペシャル「日本人はるかな旅」という大型企画が動き出し、5回の長時間連続番組としてテレビ放映され人気を博した。さらに、その各回に対応する全5冊のシリーズ、『日本人はるかな旅』（2001～2002年）（第1巻「マンモスハンター、シベリアからの旅立ち」、第2巻「巨大噴火に消えた黒潮の民」、第3巻「海が育てた森の王国」、第4巻「イネ、知られざる1万年の旅」、第5巻「そして“日本人”が生まれた」）がつづけて刊行された。「日本人・日本文化の起源」の研究プロジェクトに参加した主要メンバーの多くが、この番組の編成と出演に加わり、さらに書籍の刊行にも関係して、『日本人はるかな旅』の5冊のシリーズは、実際には研究プロジェクトの成果を、わかりやすい形で社会に提供する場となったのである。

この事実は「日本人と日本文化の起源」をめぐる問題が、アカデミックな世界だけではなく、もっと広く世間一般の興味をひく問題であり、したがって、ジャーナリズムが積極的にとりあげる課題にもなったことをよく示している。「日本人・日本文化の起源」の研究プロジェクトの成果をとりまとめた独自の書冊の出版が実現しなかった背景には、こうした事情が存在している。

このような問題点を含め、日本民族文化起源論をめぐる今日的な課題および今後についての若干の展望を、次に示す4点ほどにまとめ、本稿のささやかな結びとすることにした。

5 日本民族文化起源論の課題と展望

第2次大戦直後の岡正雄らによる問題提起にはじまり、最近の日文研を中心とした「日本人・日本文化の起源」の研究プロジェクトに至るまで、戦後における日本民族文化起源論の経て来た道の大筋を概観してきたが、そこにはいくつかの特色と問題が存在するようである。

①このような一連の研究を通じ、日本文化が多元的で多重な構造をもつという認識が広く共有されるようになったことがまずあげられる。前述のように、柳田国男は、一国民俗学の立場に立ち、日本文化を単一・同質の稲作文化だと想定してきた。石田英一郎はじめ、この見解をサポートしてきた研究者は少なくない。それに対し、岡学

説にはじまる民族学を中心とする日本民族文化の起源論は、アジア諸地域の民族文化との比較研究の成果を背景として、日本列島へは北や南からのいくつかのルートを経てさまざまな文化が流入し、それらが重なり合って日本文化が形成されたと考えるようになった。それに伴い、日本の基層文化の形成についても、少なくとも縄文時代までは視野に入れて考察することが一般的になったといえることができる。日本語が混合語の一種として捉えられ、その形成が論じられるようになったのも、日本文化の多元的起源論に照応する研究の進展だといえることができる。

②上述の民族学を中心とした日本文化の多元的起源論の展開を支えたのは、考古学、人類学などの隣接諸科学の研究成果の蓄積が重要であるが、さらにその研究の展開を助長したのは、遺伝学や生態学、地球化学や分子生物学その他の自然科学の分野における研究の著しい進歩があり、そうした先端科学の諸成果の文化起源論への応用がある。なかでもDNA分析による研究の展開は、人類の進化や拡散、作物や家畜などの起源や伝播の問題などの解明に寄与するところが少なくない。しかし、こうした自然科学系の研究が進展すればするほど、研究分野が細分化され、精緻化されて人文・社会科学系の研究者との会話が難しくなる傾向がある。日本文化の起源を学際的・総合的に論じようとする場合、この点が今後ますます難しくなることが想定されるのである。

佐々木高明・森島啓子編『日本文化の起源—民族学と遺伝学の対話』（1993）は、総合研究大学院大学の共同研究の成果報告の一部として刊行されたものだが、ここでは、民族学と遺伝学の対話の中から日本文化の起源の問題への具体的なアプローチがいくつか試みられた。しかし、それ以後、こうした試みが継続的に展開された事例は、ほとんどみられないようである。

③本稿の冒頭で、日本の民族学的研究の中には「日本人ないし日本民族のアイデンティティを問うという問題意識が通奏低音のように存在すること」を、J・クライナーが指摘していることを述べた。だが、最近では、それが通奏低音ではなく主^{メイン・テーマ}題の一つとして演奏されるようになってきたようである。前述のように、尾本を代表者とした「日本人と日本文化の起源」の研究プロジェクトの成果が、NHKの長時間番組の基礎になり、その番組をもとに編集された『日本人はるかな旅』（全5冊）が、日文研プロジェクトの実質的な報告書になったという事実は、そのことをよく示している。おそらくその背景には、最近における知的大衆の成長と国際化や多文化社会の進展によって、日本人や日本文化のアイデンティティを問うという意識が巷間に著しく広がったことがある。それをうけてジャーナリズムが、この種の問題に強い関心を示

し始めたということであろう。その構造は「邪馬台国問題」を中心とした古代史ブームの展開と類似したところが少なくない。学界として、こうした社会的要請に対し、何らかの形でそれに応ずる必要性があるのではなかろうか。

④最後にもう一つ考慮すべき点は、自然科学分野の研究の進展に伴い、各種の新しい研究の成果が数多く出現し始めると、それらを総合的に理解し、わかりやすくまとめていくには、かなりの知識とテクニックを必要とし、それにはある種のプロデューサーを必要とすることである。日本人と日本文化の起源の問題を、学際的・国際的・総合的に進めていくためには、それなりのすぐれたプロデューサーが必要だということであろう。

さらに、このような総合的な研究を実質的に進展させるためには、すぐれたプロデューサーだけでなく、大型の共同研究を十全の形で進めていくための研究体制の整備が何よりも必要なことは言うまでもない。現代は戦前の鳥居龍蔵、岡正雄のように、個人の力で日本文化起源論を展開させるという時代ではなくなっている。今までにくり返し述べてきたように、最近では自然科学や人文・社会科学のさまざまな分野の精細な研究成果を持ち寄り、それらを総合して日本文化の起源論が構成されるようになってきている。したがって、この種の起源論のより一層の発展のためには、しっかりした研究の協業のシステムの構築が必要である。そのためにはすぐれたリーダーあるいはプロデューサーがまず必要であり、それをバックアップするしっかりした研究組織が必要である。

わが国における現在の状況では、2004年に国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館・国際日本文化研究センター・総合地球環境学研究所および国立民族学博物館の五つの研究機関によって、新しく構成されることになった巨大な研究組織である大学共同利用機関法人・人間文化研究機構が、この種の専門分野を超える大型の研究プロジェクトを組織し、学際的・総合的に「日本民族文化の起源」の問題に取り組むことが、もっとも適当なのではないかと私は考えている。

ところが、この種の大型の研究プロジェクトが、例え立ち上げられたとしても、なお、大きな問題点として残るものがある。それは大林太良がすでに指摘したように「この第三期の研究（大林・江守・坪井・佐々木らに代表される戦後第一世代の研究のこと）を受けつぐ、より若い世代の民族学者による日本民族文化形成論の研究が低調なことが、今日の難問になっている」（大林 1996: 165）ことである。

最近の若い民族学の研究者たちの間で、この種の問題の研究への関心がきわめて低く、日本民族文化起源論というような歴史民族学的な課題はほとんど無視されている

といっても過言ではない。隣接の人類学や考古学の分野などでは、日本人や日本文化の起源に関心を抱く若い研究者の数は少なくない。それに対し、民族学の分野におけるこのような状態はきわめて深刻である。

歴史民族学的な研究が、古い手垢のついた研究として、それへの関心が著しく低下したこと、さらにこの点もすでにJ・クライナーが指摘した「民族学の対象がエトノス＝民族から遠く離れ、かなり一般的・普遍的な概念である文化に向かって大きく推移してきた」(J.クライナー 1996: 8)という日本民族学界(文化人類学界)の現状が、こうした問題を生み出す大きい要因だと考えられるのである。

この点を、今後、どのように克服していくのか。日本民族文化の起源、その形成過程の解明の問題にかかわって、あるいはもう少し一般化してエトノス＝民族にかかわる文化史の問題をどのようにとり扱い、その研究の展開をどのように図ろうとするのか。日本の民族学界(文化人類学界)は、今後に大きな課題を残しているようである。

このような課題の解決に向け、積極的で具体的な方向性が一日も早く見いだされることを、本稿を終るに当たって私は強く望むところである。

注

- 1) 岡は「25年の後に」(岡 1958a)という回想録の中で、この論文が1933年にウィーンですでに出来上がっていたという。その目次は、岡の主要論文を集成した『異人その他』(1979)に収録されており、この論文の内容その他については住谷が詳しく述べている(住谷 1979)。
- 2) この座談会の記録は、詳しい注を付して、その後『日本民族の起源』として刊行され、一般市民にも広く知られるようになった(石田・江上・岡・八幡 1958)。
- 3) 戦後の日本経済の発展と外貨事情の好転とともに、文部省は1963年に「科学研究費補助金」に「海外学術調査」の枠を設けることに踏み切ったが、初期の補助金の規模は小さいものであった(1963年に最初に海外学術調査の補助金を交付された7隊のうちの一つに「東南アジア稲作民族文化総合調査団」の第3次隊がある。そのときの記憶では補助率は全経費の50%にはるかに満たない程度であった)。しかし、その後、日本経済の発展とともに、この種の補助金の額は急激に増加し、1970年代以降のわが国の海外学術調査の盛行を担保することとなった(海外学術調査に関する総合調査研究班『海外学術調査・最近10年間の成果と動向』1988による)。
- 4) 照葉樹林文化論については、私の最近の著作『照葉樹林文化とは何か—東アジアの森が生み出した文明』(2007)において、その文化の特色を概説するとともに、中尾を中心にして照葉樹林文化論が成立・展開してきたプロセスを詳しく論じている。
- 5) その過程で中尾佐助によりナラ林文化(東北アジアのモンゴルナラを中心とするナラ林帯に特有な文化クラスターの存在を考える学説)の提唱が行われた。

文 献

石田英一郎

1969『日本文化論』東京：筑摩書房(『石田英一郎全集3』1970所収)。

- 石田英一郎・岡 正雄・江上波夫・八幡一郎
1949 「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」『民族学研究』13(3): 207-277。
- 石田英一郎・江上波夫・岡 正雄・八幡一郎
1958 『日本民族の起源——対談と討論』東京：平凡社。
- 石田英一郎編
1966 『シンポジウム 日本国家の起源』東京：角川書店。
- 石田英一郎・泉 靖一編
1968 『シンポジウム 日本農耕文化の起源』東京：角川書店。
- 岩田慶治
1966 『日本文化のふるさと——東南アジアの稲作民族をたずねて』東京：角川書店（『岩田慶治著作集 第1巻 日本文化の源流——比較民族学の試み』東京：講談社，1995 所収）。
- 上山春平・佐々木高明・中尾佐助
1976 『続・照葉樹林文化——東アジア文化の源流』東京：中央公論社（『中尾佐助著作集』第4巻 景観と花文化』北海道：北海道大学図書公刊会，2005 所収）。
- 江上波夫
1967 『騎馬民族国家——日本古代へのアプローチ』東京：中央公論社。
- NHK スペシャル「日本人」プロジェクト編
2001～2002 『日本人はるかな旅』（全5巻）東京：日本放送出版協会。
- 江守五夫
1986 『日本の婚姻——その歴史と民俗』東京：弘文堂。
1990 『家族の歴史民族学——東アジアと日本』東京：弘文堂。
- 大林太良
1961 『日本神話の起源』東京：角川書店。
1973 『稲作の神話』東京：弘文堂。
1977 『邪馬台国——入墨とボンチョと卑弥呼』東京：中央公論社。
1979 「日本民族起源論と岡正雄学説」岡正雄『異人その他』pp. 415-431，東京：言叢社。
1984 『東アジアの王権神話』東京：弘文堂。
1986a 『日本神話の系譜——日本神話の源流をさぐる』東京：青土社。
1986b 「歴史民族学（文化史）」日本民族学会編『日本の民族学 1964～1983』pp. 1-7，東京：弘文堂。
1990 『東と西，海と山——日本の文化領域』東京：小学館。
1991 『北方の民族と文化』東京：山川出版社。
1992 『正月の来た道——日本と中国の新春行事』東京：小学館。
1996 「日本民族の起源」ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の現在——1980年代から90年代へ』pp. 161-167，東京：新曜社。
- Obayashi Taryo
1991 The Ethnological Study of Japan's Ethnic Cultures: A Historical Survey. In OBAYASHI Taryo (ed.) *The Formation of Japan's Ethnic Culture: Comparative Approaches. (Acta Asiatica 61)*. Tokyo: The Toho Gakkai.
- 大林太良編
1994 『異人その他（岡正雄論文集）』東京：岩波書店（岩波文庫）。
- 岡 正雄
1956 「日本民族文化の形成」『図説日本文化史大系 第1巻』pp. 106-116，東京：小学館（後に『異人その他』1979 に所収）。
- 1958a 「二十五年の後に」石田英一郎・江上波夫・岡正雄・八幡一郎『日本民族の起源——対談と討論』pp. 301-332，東京：平凡社（後に『異人その他』1979 に所収）。
- 1958b 「日本文化の基礎構造」『日本民俗学大系 第2巻』pp. 5-21，東京：平凡社（後に『異人その他』1979 に収録）。
- 1979 『異人その他——日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』東京：言叢社。
- 加藤九祚編
1984 『日本のシャマニズムとその周辺——日本文化の原像を求めて』東京：日本放送出版協会。
- 蒲生正男ほか
1970 「シンポジウム・岡学説と日本民族＝文化の系統起源論の現段階」『民族学からみた

- 日本（岡正雄教授古稀記念論文集）』 pp. 373-434, 東京：河出書房新社。
- 君島久子編
1989 『日本民間伝承の源流——日本基層文化の探求』 東京：小学館。
- クライナー、ヨーゼフ
1996 『日本民族学・文化人類学の歴史』 ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の現在——1980年代から90年代へ』 pp. 3-8, 東京：新曜社。
- 国分直一
1970 『日本民族文化の研究』（考古民俗叢書7）東京：慶友社。
1976 『環シナ海民族文化考』（考古民俗叢書15）東京：慶友社。
1992 『日本文化の古層——列島の地理的位相と民族文化』 東京：第一書房。
- 小山修三編
1992 『狩猟と漁労——日本文化の源流をさぐる』 東京：雄山閣出版。
- 佐々木高明
1971 『稲作以前』 東京：日本放送出版協会（NHK ブックス147）。
1982 『照葉樹林文化の道——ブータン・雲南から日本へ』 東京：日本放送出版協会（NHK ブックス422）。
1991 『日本史誕生（日本の歴史①）』 東京：集英社。
1997 『日本文化の多重構造——アジアの視野から日本文化を再考する』 東京：小学館。
2003 『南からの日本文化（上）——新・海上の道』 東京：日本放送出版会（NHK ブックス980）。
2007 『照葉樹林文化とは何か——東アジアの森が生み出した文明』 東京：中央公論新社。
- 佐々木高明編
1983 『日本農耕文化の源流——日本文化の原像を求めて』 東京：日本放送出版協会。
2002 『日本文化の起源をめぐる研究——戦後の共同研究の流れの中での位置づけと評価』 『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究 研究成果報告書Ⅰ』 国際日本文化研究センター特定領域研究「日本人・日本文化」事務局。
- 佐々木高明・大林太良編
1991 『日本文化の源流——北からの道・南からの道』 東京：小学館。
- 佐々木高明・森島啓子編
1993 『日本文化の起源——民族学と遺伝学の対話』 東京：講談社。
- 崎山 理編
1990 『日本語の形成』 東京：三省堂。
- 杉本尚次編
1984 『日本のすまいの源流——日本基層文化の探求』 東京：文化出版局。
- 住谷一彦
1979 『岡正雄『古日本の文化層』——或る素描 岡正雄『異人その他』 pp. 432-452, 東京：言叢社。
- 竹村卓二編
1986 『日本民俗社会の形成と発展——イエ・ムラ・ウジの源流をさぐる』 東京：山川出版社。
- 坪井洋文
1979 『イモと日本人——民俗文化論の課題』 東京：未来社。
1982 『稲を選んだ日本人——民俗的思考の世界』 東京：未来社。
- 中尾佐助
1966 『栽培植物と農耕の起源』 岩波書店（『中尾佐助著作集』第1巻，2005所収）。
中尾佐助・佐々木高明
1992 『照葉樹林文化と日本』 東京：くもん出版。
- 埴原和郎編
1993 『日本人と日本文化の形成』 東京：朝倉書店。
- 藤井知昭編
1985 『日本音楽と芸能の源流——日本文化の原像を求めて3』 東京：日本放送出版協会。
- 松本信広
1971 『日本神話の研究』 東京：平凡社（東洋文庫180）。
1978～79 『日本民族文化の起源』（全3冊）東京：講談社。
- 三品彰英
1970～74 『三品彰英論文集』1～6巻 東京：平凡社。
- 柳田国男
1961 『海上の道』 東京：筑摩書房（『定本 柳田国男集』第1巻，1963所収）。